第２章　和歌山県瀬戸遺跡の第６次発掘調査

伊藤淳史

１　調査の概要

位置と環境　瀬戸遺跡は，和歌山県西牟婁郡白浜町459に所在する京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所の構内に所在する。田辺湾の南側，紀伊水道に突き出た小さな半島上にあり，西端の番所山（標高約32m）と東側の陸地との間に形成された，幅200mたらずの低平な陸繋砂州上に立地している（図６）。

既往の成果　この地は，1965年の図書室の建設工事に際して，実験所技官であった樫山嘉郎氏により縄文晩期の石棒などが採取されたことから，遺跡の存在が明らかとなった〔伊勢田1966〕。その後，数次にわたる試掘・発掘調査や工事に際しての立合調査が構内各所で実施され，ほぼ構内全域に縄文時代～近世にわたる遺跡のひろがりが想定されるに至っている（表１･図７，以下本章では報文の掲載年報を〔昭＊年報〕のように表記する）。既往の調査のなかで，縄文晩期の屈葬人骨（第２次調査・地点３〔昭52年報〕），弥生前期の配石墓や古墳前期製塩土器溜（第４次調査・地点６〔昭57年報〕），奈良時代の石敷製塩炉（第５次・地点９〔昭57年報〕）などはとりわけ特筆すべき成果であり，石敷製塩炉については構内に移築復原の処置が施されている（図版７－３）。また，弥生前期土器とともに出土する突帯文深鉢には，「瀬戸タイプ」と呼称される特徴的な一群の存在が指摘されており〔中村貞1984〕，縄文～弥生への移行期の様相を検討するうえで重要な資料を提

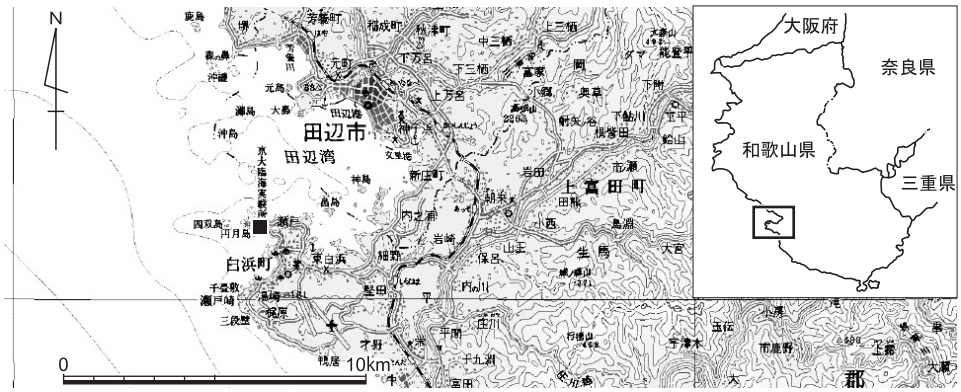

図６　瀬戸遺跡の位置（■）　縮尺1/25万

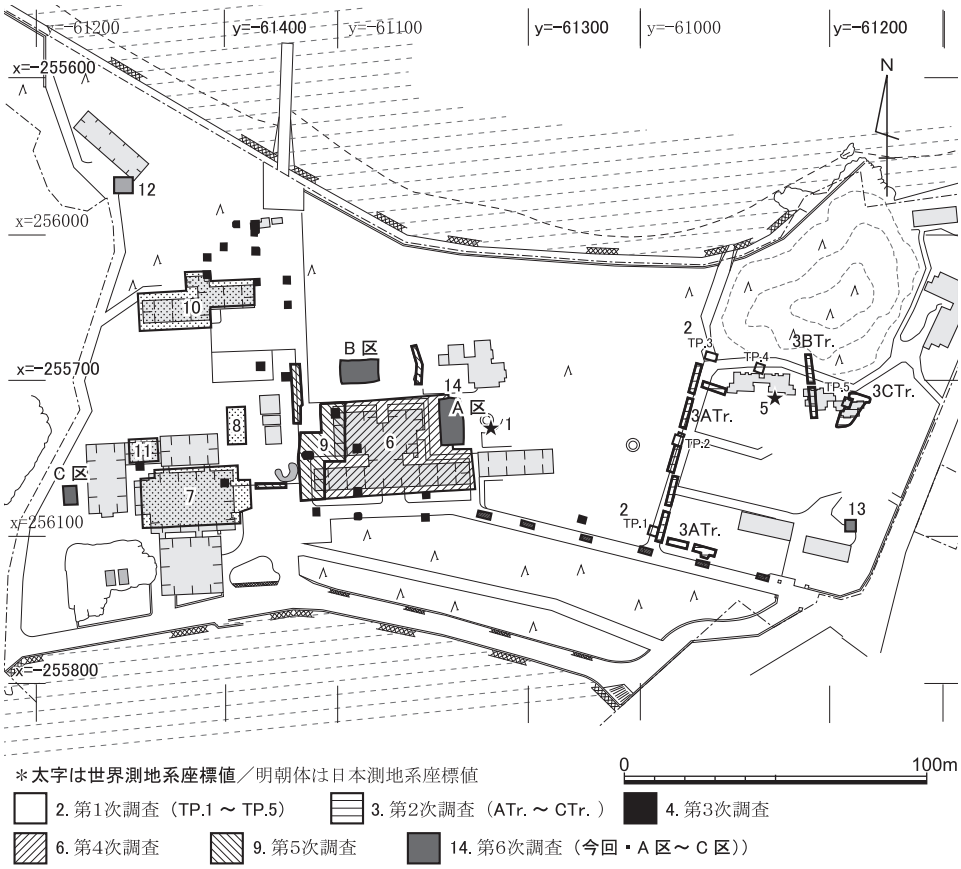

図７　瀬戸臨海実験所構内の遺物採集・発掘・試掘・立合調査地点（地点番号は表１と対応）
縮尺1/2500

供している。

経緯と経過　　こうしたなか，今回，実験所構内における施設環境整備の一環として，研究棟の増設や浄化槽とオイルタンクの設置が計画されたことから，予定地３箇所の計160㎡を対象として発掘調査をおこなった。調査区はそれぞれA・B・Cと呼称する（図７）。調査期間は2020年８月17日～８月29日。調査の結果，それぞれの調査区で縄文時代～古代に至る遺物を包含する堆積層の広がりが把握され，明確な遺構の確認には至らなかったものの，土器や石器など整理箱２箱分の遺物出土をみた。27日には白浜町文化財審議会，28日には実験所教職員など関係者にこれらの調査成果を現地公開した。なお現地調査は，文化財調査活用部門の伊藤が期間を通じて，千葉・冨井・内記が交代で，それぞれ担当し，長尾玲が補佐した。また白浜町教育委員会佐藤純一氏からも適宜協力と助言を得た。遺物

表１　瀬戸遺跡に関する発見・調査関連一覧（地点番号は図７に一致）

地点	種別	年次	概要	文献
1	採集	1965	樫山嘉郎氏による石棒等採集。	伊勢田1966
2	試掘	1976	第１次調査。時期不明配石と縄文晩期土器包含層。	昭51年報４章
3	試掘	1977	第２次調査。古墳時代列石・箱式石棺・縄文晩期屈葬人骨。古墳時代須恵器・縄文晩期土器出土。	昭52年報５章
4	試掘	1979	第３次調査。古墳～平安時代土器・製塩土器出土。	昭54年報５章
5	採集	1980	田名瀬英朋氏による土偶採集。	昭55年報図版２
6	発掘	1981	第４次調査。弥生前期配石墓・土坑・古墳時代製塩土器溜。弥生～平安時代土器出土。	昭57年報５章
7	立合	1981	実験水槽新営工事立合。縄文後期土器採集。	昭56年報１章
8	立合	1981	浄化槽工事立合。	昭56年報１章
9	発掘	1982	第５次調査。奈良時代石敷製塩炉・須恵器埋甕・土器溜	昭57年報５章
10	立合	1983	寄宿舎取り壊し工事立合。	昭58年報１章
11	立合	1992	第４実験水槽室新営立合。縄文後期土器・石器出土	1992年報１章
12	立合	2007	白浜海の家新営その他工事立合。古代土坑，須恵器・土師器出土。	2007年報１章
13	試掘	2015	職員宿舎浄化槽設置立合。土師器細片のみ。	2015年報１章
14	**発掘**	**2020**	**第６次調査（今回）。縄文後期～古代土器・石器出土。**	**本年報**

整理と本章の作成は，長尾・西田陽子の助力のもと伊藤がおこなった。

２　各調査区の概要と層位

⑴ Ａ区（図版２・３，図８～10）

地区概要　現研究棟東側の増設予定地に，南北15m東西７mの調査区を設定した。このうち，研究棟建設時の発掘調査（４次調査）範囲に含まれている部分を除いた，未調査と推定される東辺寄りの２m幅程度を人力での発掘対象とした。既往の調査区との位置関係は図８，調査区の平面を図９，東壁の南北方向の層位を図10に示す。なお層位は，中央付近が崩落して測図不能となったため，南辺と北辺に分離して呈示している。

層位と遺構　調査地東側は１m近く盛土された高まりとなっており，それら表土層を除いた標高７m前後から，30～40㎝程度の厚さで黄褐色砂が堆積している。その下には，褐色砂，暗褐色砂と土壌化しているように徐々に暗色化していく砂層の堆積があり，それぞれ不安定だが20～40㎝の厚さをもつ。両層とも移行は漸移的で，おもに色調の濃淡では上下に細分されるが，ここでは大別してひとつの層として扱っている（図10）。また，これらの層内では，黒色化した砂が埋積する不定形な染み状の輪郭が検出される（図版３，

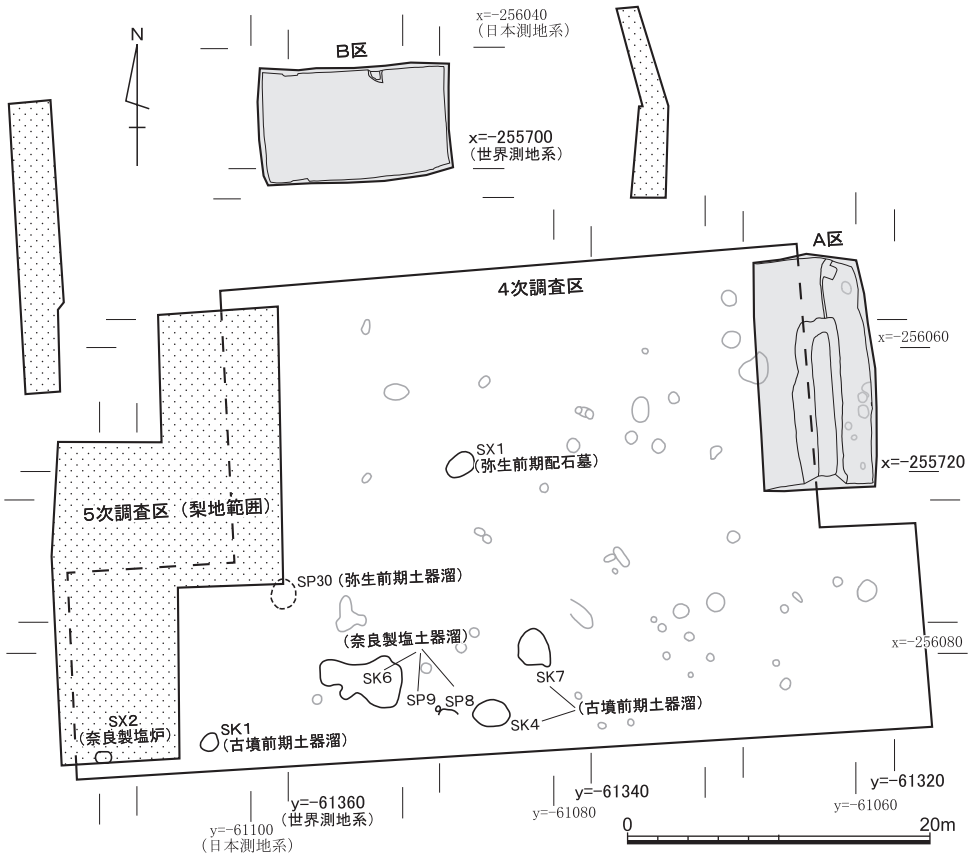

図８　４・５次調査区主要遺構とＡ区・Ｂ区の位置　縮尺1/500

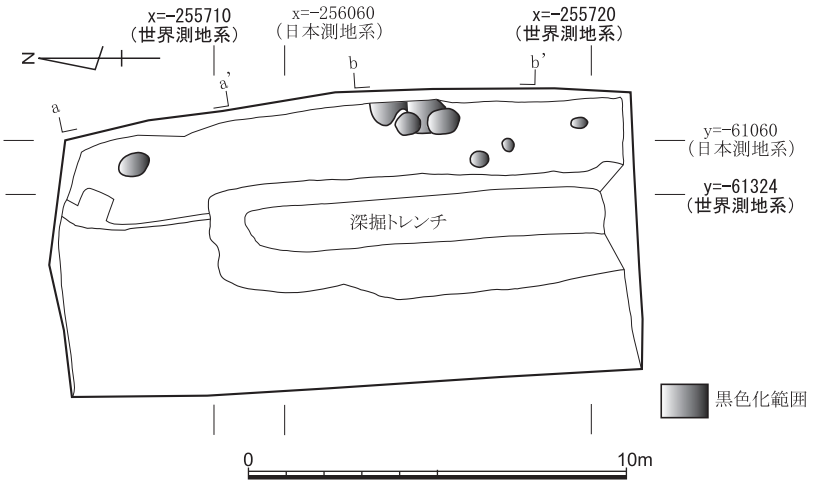

図９　Ａ区平面図（暗褐色砂上面）　縮尺1/200

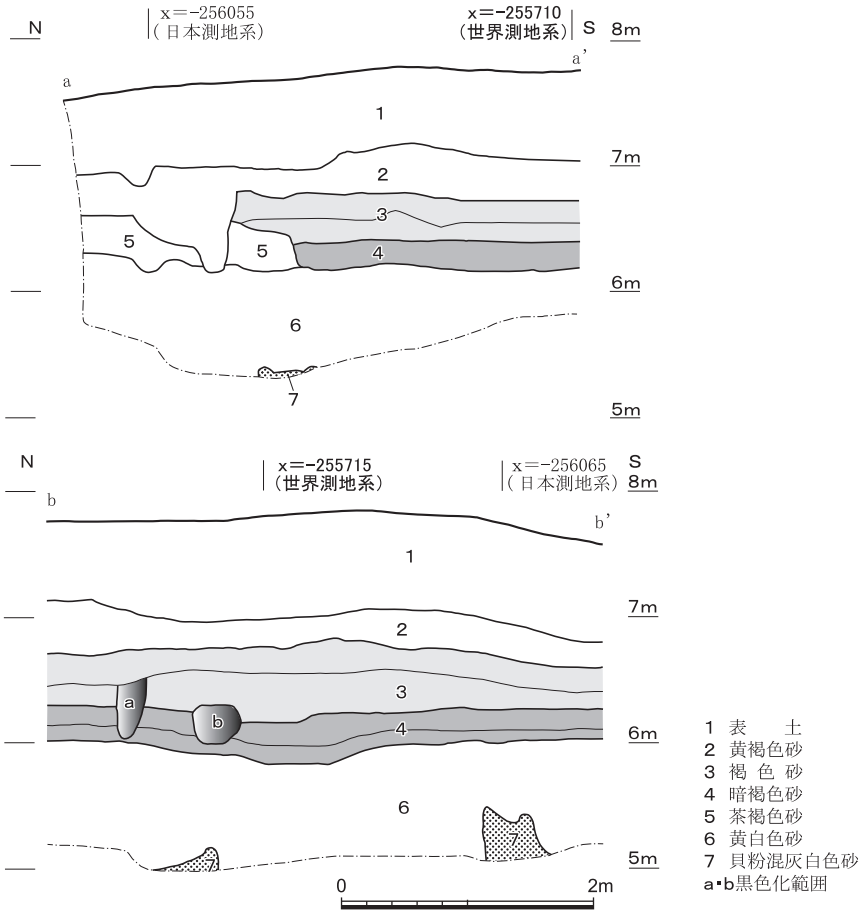

図10　A区東壁の層位（上段：図９ａ－ａ’地点，下段：図９ｂ－ｂ’地点）　縮尺1/60

図10－ａ・ｂ）。断面を確認しつつ掘り下げたところ，遺物はほとんど出土せず，埋積砂と周囲の境界は曖昧で形状も明瞭ではないことから，人為的な遺構である可能性は低いと判断した。西側の４次調査範囲においても，黒色砂を埋土とするピット群が縄文晩期の小土坑群として報告されているが〔昭57年報　図版20－２〕，これらのいくつかも同種のものであった可能性が考えられる。調査区の北端付近で３層と４層は消失し，５層の茶褐色砂が確認される。そして，全域の下部には精良な第６層黄白色砂層が１ｍ近く堆積し，さらに標高５ｍ程度で，層の上面が激しく上下する第７層貝粉混灰白色砂の上面に達する。第６層以下は無遺物と判断し，掘り下げはしていない。

層の帰属時期　　出土している遺物はきわめて乏しいため，各層の時代を厳密に特定す

ることは難しいが，５層の茶褐色砂が堆積する調査区北辺付近で攪乱砂中より縄文後期前葉ころとみられる土器片（Ｉ５）が採集されていることは推測の手がかりとなる。この資料は本来５層中に含まれていた可能性が高いと判断される。これより上部で微量出土しているのが後期後葉～晩期とみられる土器片であり，５層は後期中葉以前，３～４層がおおむねそれ以後の後期後葉～晩期ころの堆積と推測されよう。

このＡ区よりも10mほど南側で記録されている４次調査区の層位所見によると，各層は北へ向かって高くなる傾向がみられ，古墳時代以降の包含層は表土と区別できなくなっていくことと，その下部に縄文晩期・弥生前期の包含層である暗褐色砂３が標高６ｍ前後にあることが記録されている〔昭57年報　図41〕。今回のＡ区でも，古墳時代の資料は表土中から製塩土器かとみられる薄片１片が採集されたにとどまるので，包含層は無かったとみて良い。そして，４次調査の暗褐色砂３が，今回調査区の３・４層に相当すると判断できる。また４次調査では，標高５ｍ付近に，今回の７層と同様な貝粉混灰白色砂が検出され，海成層と報告されている。Ｂ区でも検出された同種層とあわせて，貝粉よりＣ^{14}年代測定を実施しており，結果は後述する。

ちりめん縞状の薄層堆積　６層の黄白色砂中には，厚さ２～３㎜程度の黄褐色の波打つ薄層が平行して10～20条形成されているのが随所で確認できた（図版３－４）。これは，砂丘表面での風紋の移動と降雨による斜面での砂移動で形成された「ちりめん縞状葉理構造」〔増田編2019　pp.118－9〕を示しているものとみられる。瀬戸遺跡の形成過程の環境をうかがわせる特徴と言えよう。

⑵ Ｂ区（図版11，図４・５）

地区概要　研究棟北側の浄化槽設置予定地に，南北８ｍ東西12mの調査区を設定した。４・５次調査区の北端から５ｍあまりを隔てた北側となる。厚さ30㎝程度のバラス混じりの表土層と管路・基礎による攪乱を機械力で除去すると，全面に灰白色砂がひろがる（図版４－１）。下層の堆積と遺物の包含状況を把握するため，調査区南壁沿いを先行して掘り下げたところ，地表下１ｍ前後に堆積する褐色砂中から，調査区西半を中心に複数の土器片が確認された。そのため，西半域を集中的に調査する方針とし，褐色砂直上までの砂層を機械力で除去して，以下を人手で進めた。

層位と遺構　40㎝程の表土下に２層灰白色砂が20～30㎝堆積する。粉砕された貝の細片を含む。上面で磁器染付片が採集されたほかは遺物を確認していない。これより下層は，わずかに西へと下るように堆積している。３層の黄白色砂は20～60㎝と，厚さが一定しな

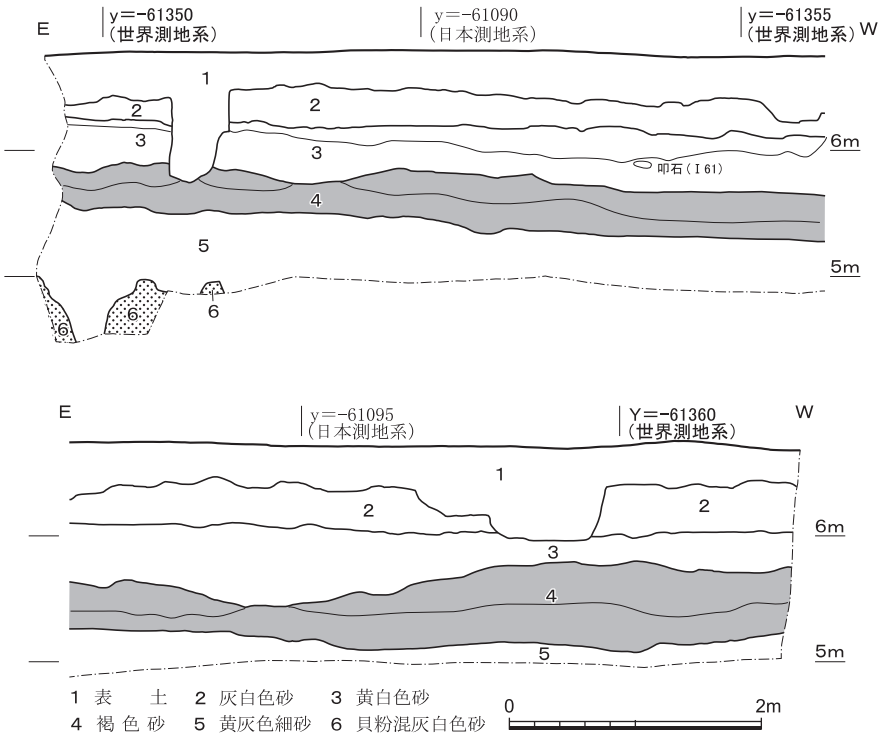

図11　Ｂ区南壁の層位　縮尺1/60

い。南壁面の調査区中央付近で，層の中位から叩石（Ⅰ61）を採集しているほかに遺物を確認していない。４層の褐色砂は，調査区西半では60cm以上の厚みがあり，Ａ区と同様に部分的に黒化の強い範囲が層内に認められる。こうした範囲を平面・断面とも特に留意して精査したが，形状は不安定で境界は曖昧なため，人為的な遺構ではないと判断した。ただし，遺物はこうした黒色範囲が目立つ調査区西半に偏って出土する傾向がある。縄文後期～平安時代の幅をもつ土器が出土し，上層に古代，下層に縄文後期後葉の土器がまとまる。この３・４層は，Ａ区と同様に色調の濃淡ではそれぞれ細分することができるが，移行は漸移的で，それぞれひとつの層として扱っている（図11）。

５層の黄灰色細砂層は，一部を断ち割り調査して厚さ50cmあまりとなることを確認した。剥片の可能性ある石片１点のみ出土している。その下部には，上面が著しく起伏する６層の貝粉混灰白色砂が確認される。先述したＡ区の７層と特徴を同じくした海成層とみられ，貝片のＣ^{14}年代測定を実施している。結果は後述する。

層の帰属時期　　４層からの出土土器の主体は縄文後期後葉の宮滝式に比定され，ほか

に，先行する元住吉山式や，後続する晩期とみられる破片，奈良時代の資料が微量みられる。縄文後期後葉の土器を中心に出土している状況を考慮すると，４層はその頃の堆積を中心としながら，それ以降奈良時代に至るまで利用されつつ最終的に堆積が完了したものだろう。したがって，上部の２・３層はその後近代に至るまでの堆積と認定されることになる。出土している叩石（Ⅰ61）は，下部から巻き上げられ混入したと判断する。

⑶ Ｃ区（図版６・７，図12・13）

地区概要　水族館西側のオイルタンク設置予定地に，東西５ｍ×南北６ｍの調査区を設定した。Ｂ区の西南およそ100ｍで，番所山が控える構内の西端に位置する。調査時はアスファルト敷きの駐車場であり，地表下の１ｍ近い盛土下部の標高5.2ｍ付近で，コンクリート製の基礎が検出された。実験所の旧施設にともなうものとみられ，現在の地表面は近年に大きくかさ上げされていたことが判明した。２層の黄白色砂中に遺物の包含がみられたため，全域を人力で掘り下げた。３層の褐色砂層以下は，７層の黄褐色砂まで順次遺構・遺物の存在に留意しながら人力と機械力を併用して掘り下げた。最終的に北壁際を標高３ｍ付近まで深掘りして８層の砂礫混黄白色砂の堆積を確認し，終了した。

層位と遺構　２層の黄白色砂は，細礫とともに小ぶりで摩滅気味の多数の土器片を包含している。平安時代の黒色土器片や奈良時代の製塩土器片を中心とするほか，弥生前期の「瀬戸タイプ」深鉢の破片も若干認められる。２層から４層の褐色細砂にかけては，層間は漸移的に移行しており，２層と４層は色調の濃淡では細分されるが，ここではひとつの層として扱う（図13）。４層からは縄文後期の粗製深鉢の胴部破片１点が出土している（Ⅰ57）。また，３層上面の標高4.7ｍ付近で，10～20㎝大程度の石が複数散在していた（図版７－１，図12－Ｓ１～Ｓ15）。間隔の規則性は判然としないが，人為的な配石の可能性を考慮し記録にとどめた。古代以前のいずれかの時期の産物ということになろう。

４層以下の堆積は，西から東へと下る傾斜で堆積している。５層は精良な細砂層で，無文の粗製土器片１点（Ⅰ50）を採集している。６層の黄褐色砂は，無遺物の精良な細砂層で50㎝近い厚さがある。遺物は確認していない。５㎜大程度までの砂礫が微量認められ，下方へ向かうほど増加し，７層の砂礫混黄白色砂へと移行する。この７層は３㎝大程度までの礫を多く包含し，標高３ｍ以下まで堆積を確認したが，下端に至らず層厚は不明である。なお，このＣ区では，Ａ・Ｂ区において把握されているような，貝粉を多量に混じえる灰白色砂層は確認されなかった。

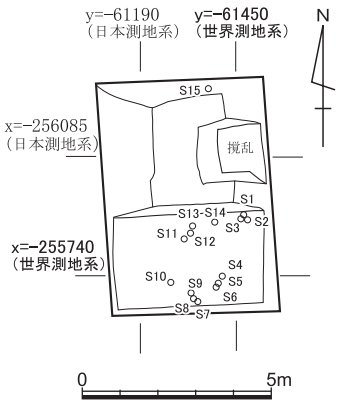

図12　Ｃ区平面図（褐色粗砂上面）
縮尺1/200

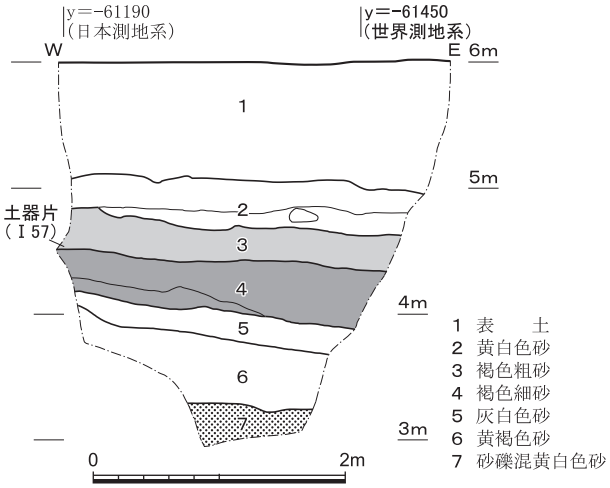

図13　Ｃ区北壁の層位　縮尺1/60

層の帰属時期　２層は奈良・平安時代の遺物を主体としていることから，古代を中心とする堆積層とみられる。３層以下は，遺物の包含が極端に少なくなるため明確な比定は難しいが，２層に混入して微量出土している「瀬戸タイプ」の突帯文土器と，４・５層中での粗製土器片の存在から，３～５層を縄文後期～弥生前期の幅で，６層はそれ以前の形成と想定しておきたい。

⑷ 各調査区層序の対応関係（図14）

以上のＡ～Ｃ区の層序に加えて，Ａ区の約70m東方に位置する第一次試掘調査第２ピットの層序（図７・昭51年度調査TP.2と表記）を参考に付加して，図14に模式図を示した。今回の調査では，いずれの調査区でも，地表面から50cm～1.5m前後において縄文後期～弥生前期の遺物を中心に包含する褐色や暗褐色の砂層が確認されており，灰色で表示した。こうした知見は既往のいずれの調査でも報告されており，その確認レベルを比較すると，今回のＡ区や第４・５次調査区の北半が標高６ｍ前後と最も高くなっていることがわかる。また，これらの地点やＢ区においては，海成層と想定される貝粉混灰白色砂層も，標高５ｍ前後と他より比較的高いレベルで確認される。この一帯が，瀬戸の砂州形成が最初に進捗したエリアであって，縄文後期ころには微高地となっていった状況が推測される。一方で，Ｃ区においては，Ａ・Ｂ区のような海成層は確認されず，下層に向かうほど粒径の大きな礫の含有が顕著となる傾向が看取されている。西側に塔島礫岩層からなる番所山を控えた位置にあり，陸繋島を形成する砂州の縁辺に立地していることを反映した堆積と評価

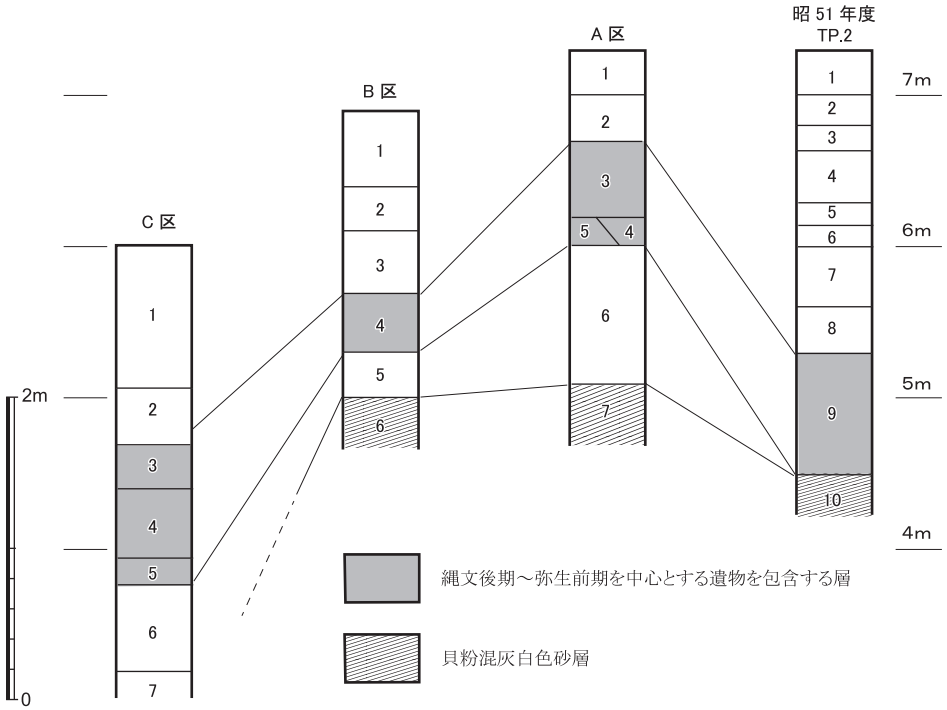

図14　地区別層序模式図　縮尺1/50（垂直方向）

できるだろう。

⑸ 砂層中に包含された貝片の年代測定（表２）

標高５ｍ前後に確認できるＡ区第７層とＢ区第６層は，ともに多量の貝殻細片を包含する砂層であり，上面に著しい起伏がみられることから（図版３－４），海成砂層と想定される。同様な特徴は，第４・５次調査区の15層でも報告されており，同一層のひろがりと見做されよう。今回は，砂堆や遺跡の形成時期を検討する情報となり得ると考え，両層に含まれる貝片の年代測定を試みた。作業は(株)加速器分析研究所に依頼し，ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定による結果を得た。同社の報告をもとに抜粋して示す（表２）。

測定の結果，較正年代は試料１がおおむね縄文後期後葉，試料２が同中葉ころとされている値が得られた。瀬戸遺跡でのこれまでの縄文土器出土状況をみると，中期初頭～前葉の資料が２点知られているほかは，後期中葉以降の資料で占められる。今回も，次節で報告するように，後期前葉ころとみられる資料を１点ふくみつつ，主体は後期後葉の資料であった。海洋試料からの年代値であるため，参考程度にとどめておく必要はあるものの，

表２　放射性炭素年代測定結果

試料 （測定番号）	内容	δ13C（‰）	14C年代（yrBP） 暦年較正用14C年代（yrBP）	暦年較正年代（1σ暦年代範囲） 暦年較正年代（2σ暦年代範囲）
1 （IAAA-201856）	A区第７層貝片	2.85±0.20	3710±20 3714±24	3537calBP-3392calBP（68.3%） 3620calBP-3331calBP（95.4%）
2 （IAAA-201857）	B区第６層貝片	5.48±0.20	4030±20 4034±24	3966calBP-3801calBP（68.3%） 4049calBP-3708calBP（95.4%）

〔IAA登録番号：＃A547〕

＊暦年較正年代はMarine20較正曲線（Heaton,T.J. et al.2020）とOxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey2009）を使用

遺跡内での活動活性化がうかがわれる土器の出土状況とは比較的整合しているといえる。砂堆形成が縄文後期のうちに一定程度完了し，安定した活動領域としての利用が継続化していった状況を示唆する情報と言えようか。これらについては第４節で再述する。

３　遺　　物

(1) A区出土の遺物（図15）

Ｉ１は口縁部で，端部から1.5cmほど下がった位置に低平な突帯が貼り付けられている。突帯上にはＶ字状の刻目が施される。特徴から，いわゆる弥生前期併行期の「瀬戸タイプ」深鉢の口縁部であろう。Ｉ２は体部の破片で，外面は全面削りがみられる。やはり瀬戸タイプのような突帯文深鉢の体部であろう。Ｉ３はこれらとやや特徴を異にする体部片で，Ｄ字形のしっかりとした刻みが施された断面三角形の貼付突帯がわずかに遺存している。

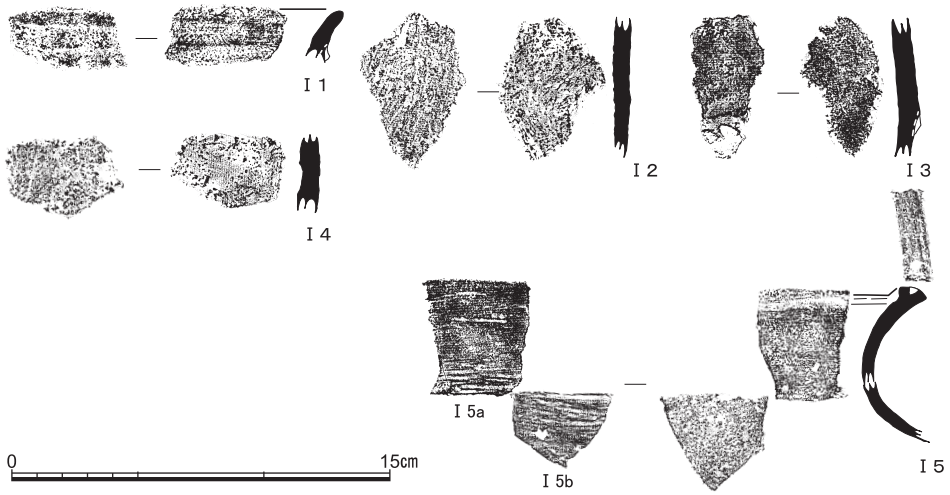

図15　A区出土の遺物（いずれも縄文土器，Ｉ１・Ｉ２褐色砂，Ｉ４・Ｉ５茶褐色砂出土，Ｉ３崩落砂内採集）　縮尺1/3

器表の外面は平滑に仕上げられている。縄文晩期末の二条突帯深鉢の部分ではないかとみられる。Ｉ４は無文の粗製土器片で，外面に縦位方向の軽い削痕が観察できる。後～晩期の所産であろうか。

Ｉ５は，同一個体とみられる質感の共通する２破片で，ａは外反する口縁から頸部付近にかけて，ｂは頸部から強く張る胴部にかけてと想定されるが，互いに接点は無い。暗茶褐色の色調を呈し，外面は横位に研磨，内面も撫でて平滑に仕上げられている。ａの口縁部は，端部を内外に弱く拡張しており，内面側が浅く凹線状にくぼむ。また，拡張された端面は丸みを帯び，突起状となる部位のあったことはわかるが，その部位で破損しており詳細を判じ得ない。突起部の裾となる箇所には棒状具による刺突が施される。遺存が少なく厳密さは欠くが，器形的特徴から縁帯文期有文深鉢の上半部破片かと推測され，縄文後期前葉の北白川上層式１期かそれにやや先行する段階あたりに比定しておきたい。

⑵ Ｂ区の出土遺物（図16・17）

古代以降の遺物　Ｉ６・Ｉ７は上部の灰白色砂出土品。Ｉ６は磁器染付の小片。内面に呉須文様をもち，口縁が波状となる小椀の一部とみられる。Ｉ７は須恵器蓋の一部で，外面は回転篦削り調整の痕跡が残る。摩滅して丸みを帯びている。６～７世紀ころのものであろうか。

Ｉ８以下は褐色砂の出土。Ｉ８は土師器杯。口唇部は短く外反し極細の沈線が施される。胎土はきわめて精良。Ｉ９はごく薄手の，Ｉ13・Ｉ14は厚手の器壁で，細粒を多量に含む胎土の無文の破片。製塩土器かとみられる。Ｉ10は内面を不十分に黒色処理したような椀で，細く尖るような口唇部の破片。Ｉ11は土師器甕の頸部で，水平に近く外反し，口縁部は短く上方に立ち上がる形状であったようである。Ｉ12は縦位の刷毛調整が施される厚手の土師器片。甕の胴部であろう。これらは，Ｉ８・Ｉ９・Ｉ13・Ｉ14が奈良時代，それ以外はおおむね平安時代のものであろう。

縄文･弥生時代の遺物　褐色砂出土のうちで，多くは下層にまとまって出土している。

Ｉ15～Ｉ24は粗製で無文の土器片。いずれも縄文後期以降，弥生時代前期併行期の瀬戸タイプ深鉢までの時間幅の所産であろう。Ｉ15は内面に横位の浅い条痕調整が認められる口縁部片で浅鉢状の器形になるものかとみられる。Ｉ16・Ｉ17は外面に縦位の明瞭な削痕がみられる破片。Ｉ16の削りは浅く，細密な条痕もともなっているが，Ｉ17は粗く削り上げる。Ｉ18は外面に縦位の，Ｉ19は内面に横位の，浅い細密な条痕が認められる破片。Ｉ20・Ｉ21は内外面とも撫で調整のみ。Ｉ22は外反する頸部付近とみられ，内面のみに横位

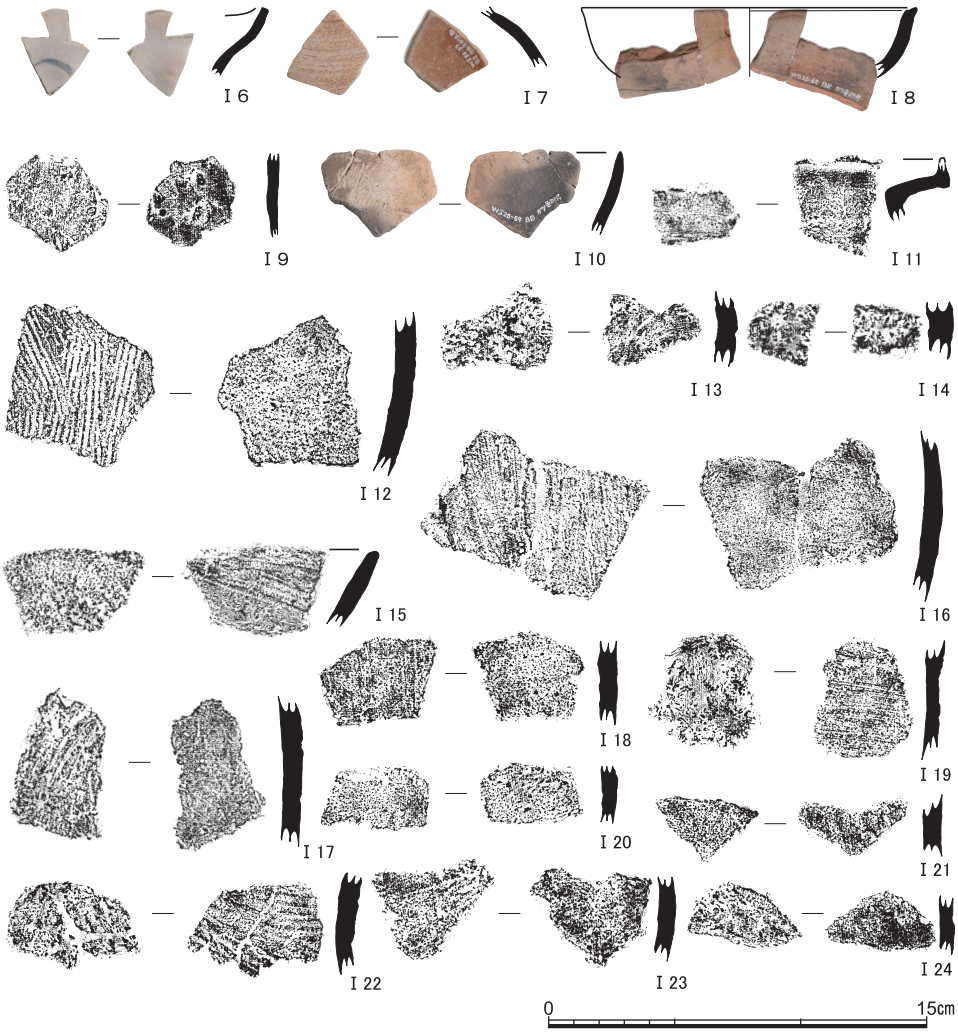

図16　Ｂ区出土の遺物（その１）（Ⅰ６磁器染付，Ⅰ７須恵器，Ⅰ８・Ⅰ11・Ⅰ12土師器，Ⅰ９・Ⅰ13・Ⅰ14製塩土器，Ⅰ10黒色土器，Ⅰ15～Ⅰ24縄文土器；Ⅰ６・Ⅰ７灰白色砂，Ⅰ８～Ⅰ24褐色砂出土）　縮尺1/3

の条痕が認められる。Ⅰ23・Ⅰ24は外面にごく浅い削痕が観察される。

Ⅰ25～Ⅰ27は突帯文をもつ土器。Ⅰ25は口縁部で，端部から１㎝ほど下がった位置に，潰れたような低平な突帯が貼り付けられる。突帯上には，形状不明瞭であるが刻みが施されているように見受けられる。Ⅰ26・Ⅰ27は体部の破片で，Ⅰ26は低平で潰れたような突帯が認められる。刻みは施されていない。Ⅰ27は崩れ気味の断面三角形の突帯上に，Ｖ字形の刻みが認められる。これらはいずれも，突帯にかなり退化した様相が感じられること

から，弥生前期併行期の「瀬戸タイプ」深鉢の部分である可能性が高いと思われる。

Ｉ28～Ｉ33は凹線文をもつ土器。Ｉ28は直立する口縁部で，端部は弱く面をもつ。外面は，口端からわずかに下がった位置に浅い幅５㎜程度の凹線がはしり，線の内外に細密な条痕をともなう。内面も横位の細密な条痕で平滑に仕上げられる。Ｉ29は直線的に開いていく器形の体部で，幅５㎜断面Ｕ字状のしっかりとした凹線が３条まで確認できる。施文部以外にごく浅い削痕がみられるほかに，調整痕は認められない。Ｉ30は逆「く」字形に屈曲する部位で，外面の屈曲部の上側にごく浅い凹線が１条まで確認される。凹線内には細密な条痕がともなう。それ以外の器表面はヘラ磨き状の調整により平滑にされている。Ｉ31も屈曲する部位の破片だが，器壁がやや厚く質感は異なる。屈曲部上側の凹線は，断面「レ」字状で線の境界が曖昧な幅の広いものとなっており，凹線の内部も含めた外面全面がヘラ磨き状に調整されている。Ｉ32はＩ31と類似の質感の破片で，屈曲部上側に３条の「レ」字状の凹線が鋭く施されているが，施文部も含めて磨かれるため，ひだ状の凹凸が連続するような文様帯となる（図版９－２左）。この文様帯上に粘土塊が貼り付いており，破損して全容は不明であるが，巻き貝による扇状圧痕文が施されていたものと推測される。５㎝程上側にもう１箇所屈曲部があることがわかるが，その部位で破損しているため器形の推移は不明である。Ｉ33・Ｉ34も「レ」字状の凹線が施文される破片。Ｉ33は２条まで確認され，凹線内に細密な条痕がともなう。器表面がやや荒れているが，施文部以外全面磨き調整されていたとみられる。Ｉ34は器壁が薄く線も細いもので，凹線の片側は低められた段状を呈している。Ｉ35・Ｉ36はこれら凹線施文の土器と質感を同じくして，ヘラ磨き状の調整で仕上げられている無文の破片である。以上は，縄文後期後葉の凹線文系土器の範疇で捉えられるものであり，そのなかでも，〔岡田2008〕による近畿地方での編年観を参照すると，屈曲の著しい器形や断面「レ」字状の凹線といった特徴から宮滝１式～同２式にかけてを主体とするものといえよう。

Ｉ37は，他の破片と趣が異なる薄手の破片で，外面に沈線による渦巻状モチーフと縄文施文がみられる。この渦巻の最外縁の沈線は押し引きによる施文であり，沈線内に鋭い刺突が連続している。縄文も節の特徴からみて撚糸ではなく擬縄文とみられる。施文技法の特徴からみて，後期中葉の北白川上層式３期～一乗寺Ｋ式の段階に位置づけられよう。

Ｉ38は底部の小片。底部の破片はこれが唯一である。底面の小さな平坦部がわずかに遺存し，そこからたちあがる胴部外面は削り上げている。こうした特徴から，晩期末以降の突帯文深鉢底部と推測される。

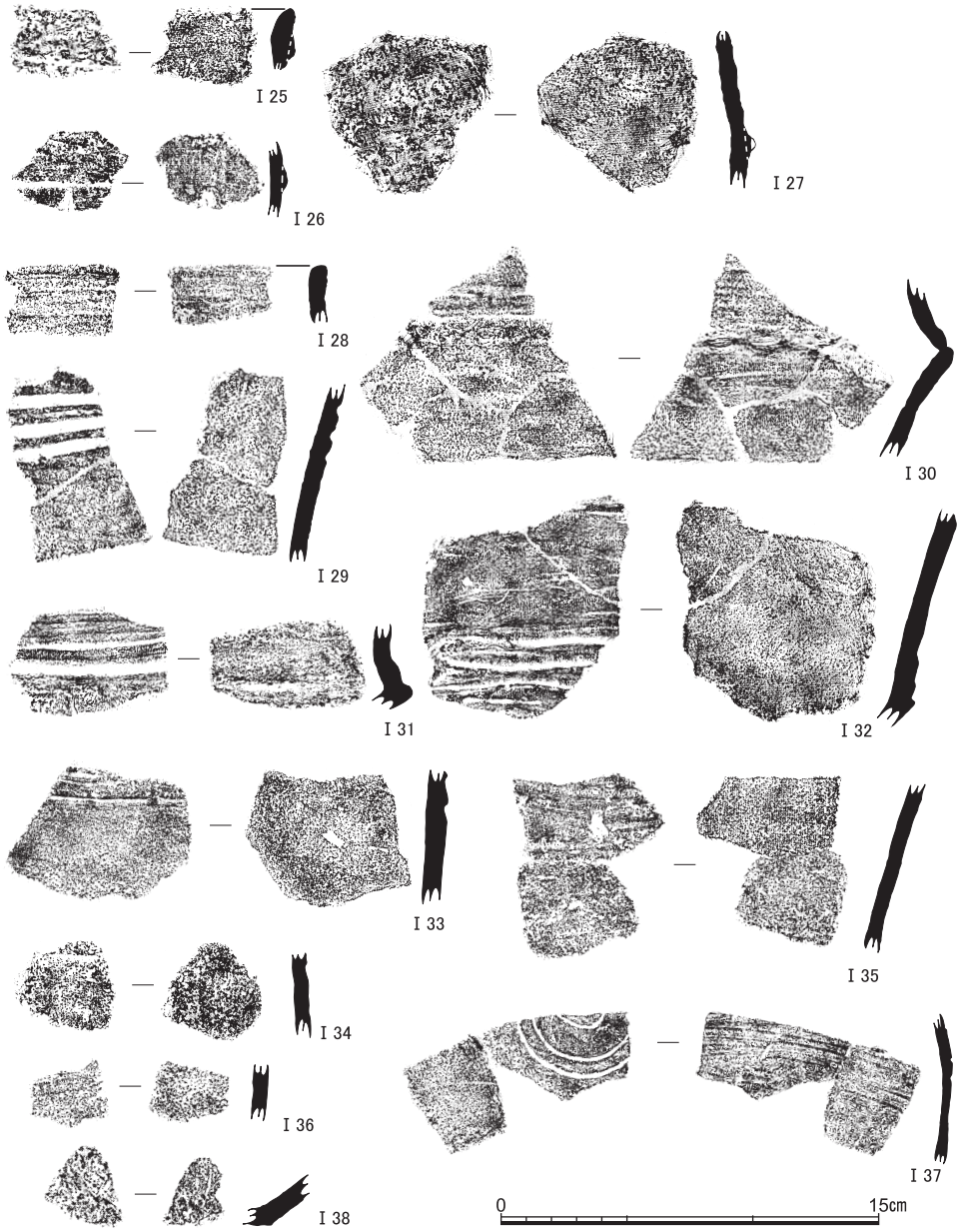

図17　Ｂ区出土の遺物（その２）（Ⅰ25～Ⅰ38縄文土器；すべて褐色砂出土）　縮尺1/3

⑶ Ｃ区の出土遺物（図18）

古代以降の遺物　上部の黄白色砂から出土しているもので，いずれも摩滅気味の小片である。Ⅰ39～Ⅰ43は土師器甕･鉢類などの口縁部。Ⅰ39がもっとも遺存率の良いもので，短く外反する口縁部は強くヨコ撫でされ，胴部は縦位に刷毛調整される。Ⅰ40は直線的な口縁部で，径の小さな鉢状の器形となるものかもしれない。口唇は指押さえにより細く尖るように仕上げられ，厚手の体部も撫で調整のみ認められる。製塩土器の可能性もあるが，胎土は砂粒が少なく精良である。Ⅰ41～Ⅰ43は外反する口縁部のみの小片。Ⅰ41・Ⅰ42は端部を面取りしている。Ⅰ43も弱い面を持つようであるが，摩滅して曖昧となっている。これらは詳細な時期比定は難しいが，奈良～平安時代のうちに属するものとみてよかろう。

Ⅰ44・Ⅰ45は黒色土器。ともに内面のみ黒色処理している。Ⅰ44は椀の口縁，Ⅰ45は高台をもつ底部で，高台には抉りが入れられている。Ⅰ46・Ⅰ47は須恵器。Ⅰ46は杯の口縁で，灰白に近い色調で焼成は堅緻。径10㎝あまりの小形品に復原される。Ⅰ47は叩きのある甕の胴部。内面には青海波の当て具痕が明瞭である。これらは，おおむね平安時代に属するものであろう。

Ⅰ48～Ⅰ52は土師器甕の胴部片。Ⅰ48は撫で調整，Ⅰ49～Ⅰ52は刷毛調整で仕上げる。奈良～平安時代のうちに属するものだろう。Ⅰ53は砂粒を多く含む厚手の破片で，内外とも粗く撫で調整する。わずかなくびれ部があり，径の小さな筒状の器形とみられるので，奈良時代の製塩土器であろう。

縄文・弥生時代の遺物　Ⅰ54・Ⅰ55は突帯文をもつ口縁部。Ⅰ54は口唇部から垂下するように幅広の突帯が貼り付けられ，下端部に細かな刻みが施される。弥生前期併行期に下る「瀬戸タイプ」の突帯文深鉢といえる。Ⅰ55は，口唇から５㎜ほど下がった位置に細めの突帯をもつ。突帯上の刻みは無いが，口唇部を刻んでいる。縄文晩期末の所産であろう。Ⅰ56は茶褐色を呈する無文の破片。器表面が荒れているため不鮮明だが，横走する浅い沈線らしきものが確認できる。時期の詳細は決めがたい。Ⅰ57は，深鉢頸部から胴部にかけての弱いくびれ部付近とみられる破片。外面は粗い撫でと軽い削痕で調整され，焼成後の補修孔が穿たれている。縄文後期の粗製深鉢であろう。

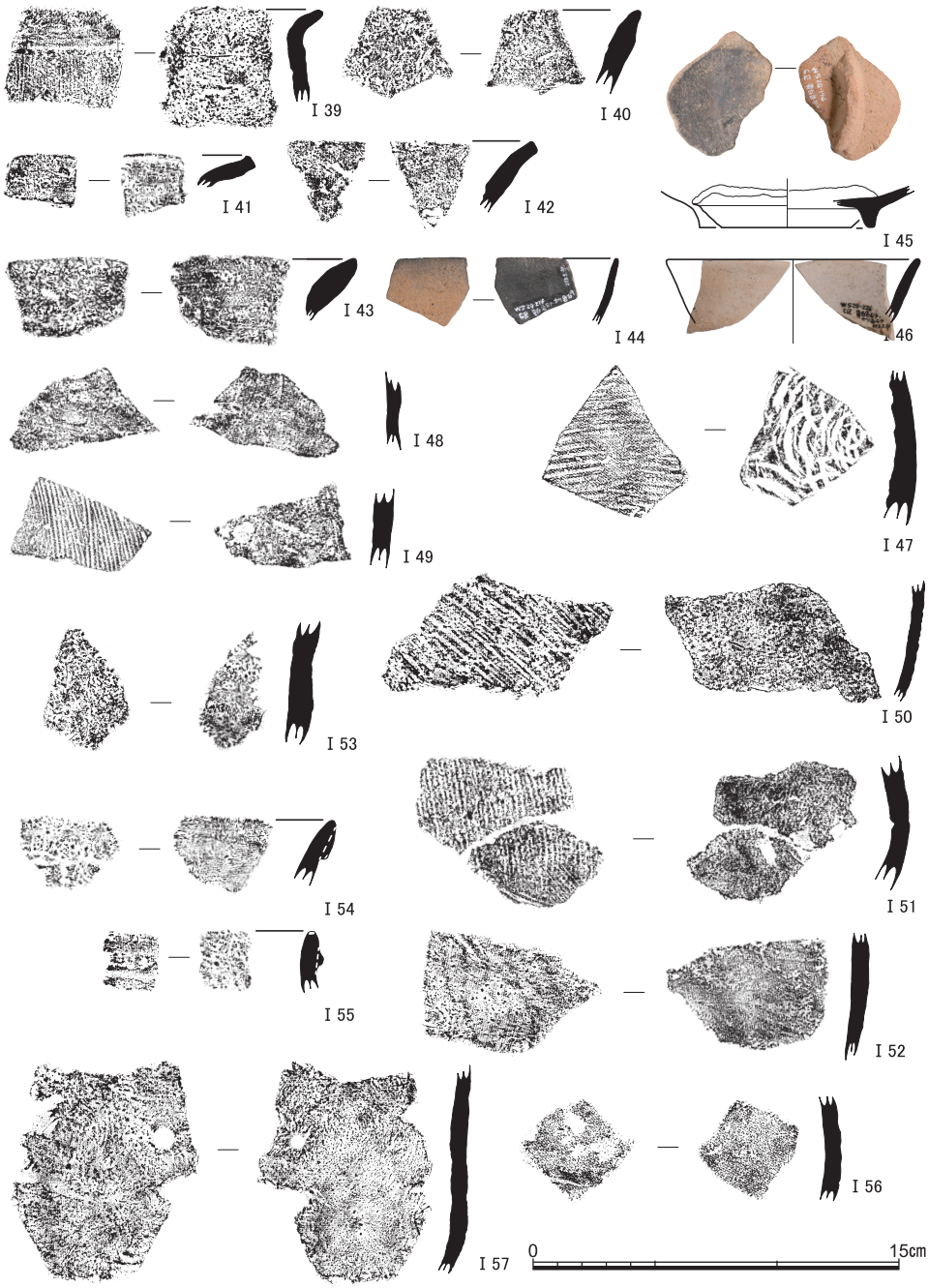

図18　Ｃ区出土の遺物（Ⅰ39～Ⅰ43・Ⅰ48～Ⅰ52土師器，Ⅰ44・45黒色土器，Ⅰ46・Ⅰ47須恵器，Ⅰ53製塩土器，Ⅰ54～Ⅰ57縄文土器；Ⅰ43～Ⅰ55黄白色砂，Ⅰ56灰白色砂，Ⅰ57褐色砂出土）縮尺1/3

⑷ 石　　器（図19）

打製石器の石鏃や剝片のほか，磨石や叩石などを少量だがすべての地区で確認している。出土土器の時期幅を勘案すると，いずれも縄文後期～弥生前期までのものであろう。

Ⅰ58は凹基無茎の打製石鏃。サヌカイト製で，長さ2.9㎝幅1.7㎝重さ1.4ｇ。側縁の基部に近い側がふくらむ五角形状の平面形態をとる。Ⅰ59は細部調整する剥片。サヌカイト製で断面三角形の楔状を呈する。長さ3.0㎝幅1.5㎝重さ3.3ｇ。

Ⅰ60は磨石とみられる砂岩の丸石で，長さ6.0㎝幅5.2㎝厚さ3.6㎝重さ139.2ｇ。両平面にがわずかに平坦化している。Ⅰ61は緻密な砂岩による棒状の叩石で，長さ13.4㎝幅5.9㎝厚さ3.5㎝重さ385.8ｇ。両平面には敲打にともなう明瞭な凹みが形成されており，片側の端面も叩きにより潰れて丸みが無くなっている。Ⅰ62は両平面に明瞭な敲打の凹みが観察される砂岩製の凹石。側縁も断続的に敲打痕が認められる。破損して本来の石材の1/3程度の大きさとなっているとみられ，残存する長さ10.9㎝×幅7.8㎝，厚さは最大で5.2㎝，重さ683.9ｇをはかる。

なお，上記のほかに，大小さまざまな形態で，質感も多様に異なる軽石が，各層より数多く出土している（図版11）。これらは，海底火山の噴火により生じて漂着したものである〔竹村2013　pp.202－3〕。凹みの認められる個体なども含まれており，人為的な加工痕とするには精査の必要はあるものの，人による利用の可能性を考慮して呈示しておきたい。

4　小　　結

遺跡の時期別展開　今回のＡ～Ｃ区の３調査区では，明確な遺構の確認には至らなかったものの，Ｂ区において，縄文後期後葉の宮滝式期を中心とする遺物がまとまって出土したことは，瀬戸遺跡の形成と展開過程を時空間的に復原していくうえで，貴重な情報を追加し得たと言える。ここであらためて，これまでの調査成果を参照しながら，時期別の遺物・遺構の確認状況を振り返り，遺跡の展開過程を考察しておきたい（図20）。

縄文中期以前　現在までのところ，瀬戸遺跡出土で最も遡る時期の遺物は，４・５次調査の「中期五領ケ台式系」１片と報告されるもの〔昭57年報　p.54〕，２次調査で中期前葉（広義の船元式に比定される）と報告されるもの〔昭52年報　図28－Ⅵ01〕が挙げられる。したがって，遺跡の形成は中期初頭～前葉ころに求めることができるが，これら以外に中期の遺物出土は無く，また近隣でも同時期の遺跡は知られていない。砂堆形成の比較的早い段階に，散発的に活動領域となった状況を反映していると理解したい。

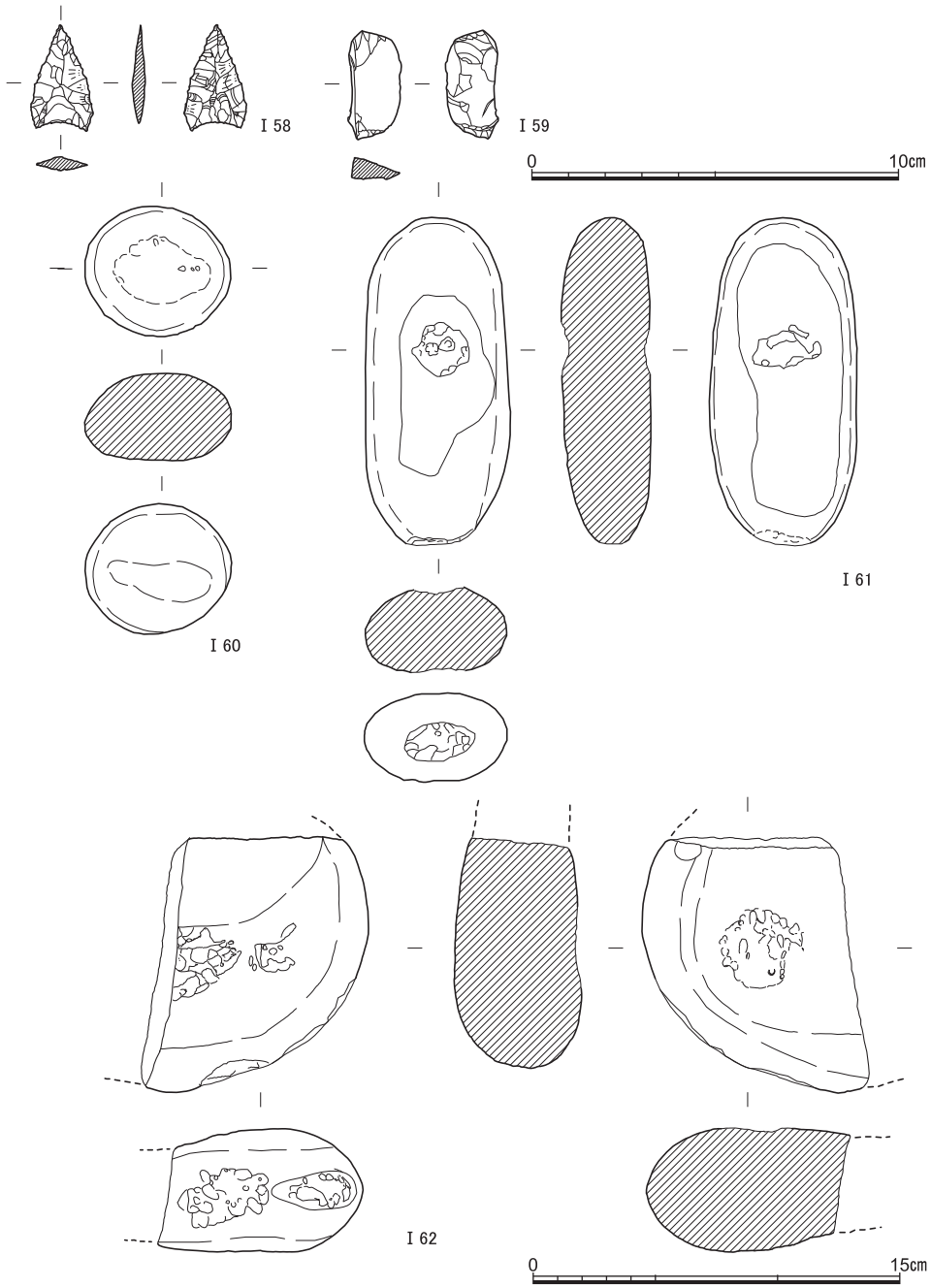

図19　石器（Ⅰ58石鏃・Ｂ区褐色砂出土，Ⅰ59剝片・Ｂ区黄灰色砂出土，Ⅰ60磨石・Ａ区暗褐色砂出土，Ⅰ61叩石・Ｂ区黄白色砂出土，Ⅰ62凹石・Ｃ区黄白色砂出土）　Ⅰ58・Ⅰ59縮尺1/2，Ⅰ60～Ⅰ62縮尺1/3

縄文後期　今回調査のＡ区において，瀬戸遺跡で初めて前葉とみられる資料が出土したが（Ⅰ５），複数点の出土は中葉でも後半ころからとなる。遺跡西域の水族館における立合調査（図７－11地点）では，一乗寺Ｋ式～元住吉山Ⅰ式期の資料がまとまって採集されている〔1992年報　pp.3－8〕。しかしそれ以外は，今回のＢ区で北白川上層式３期～一乗寺Ｋ式頃とみられる１点（Ⅰ37）と，２次調査で元住吉山Ⅰ式に比定される１点〔昭52年報　図28－Ⅵ02〕が知られるにとどまる。資料の現況では，この段階の活動域はまだ限られた範囲にとどまっていた可能性が高く，複数地点でまとまった出土が確認されるようになる続く後葉の宮滝式期が，遺跡の展開上で最初の画期を成しているといえる（図20－１）。遺跡西域では水族館の新営地点（図７－７地点）〔昭56年報　p.4〕，中央付近では今回のＢ区でまとまった土器の出土があり，東域では２次調査Ａトレンチ南半で小ブロックの群在する貝塚も確認されている〔昭52年報　pp.26－7〕。第２節で⑸で既述した海成砂層（Ａ区７層・Ｂ区６層）の年代測定結果や，Ａ区でその上部にみられたちりめん縞状薄層の存在も考慮すると，陸繋島の砂堆形成が安定を迎え，利用が本格化した段階がこの後期後葉であったと評価することもできよう。

縄文晩期～弥生前期　縄文晩期は，前葉の資料について存在が不詳であり，中葉の滋賀里Ⅲ式になって若干の出土が知られるようになる〔昭52年報図28－Ⅵ08～Ⅵ11〕〔昭57年報　p.54〕。濃密な出土は晩期後葉の突帯文土器段階からが明瞭であり，第２の画期と評価できる（図20－２）。この段階は，後期までの状況とは異なり，２次調査区や４・５次調査区など遺跡中央から東寄りの範囲が中心となっており，それ以外の周辺はごく少量の出土にとどまっている。そして現況では，晩期終末～弥生前期前半にかけての「瀬戸タイプ」突帯文土器や遠賀川式土器の出土は，遺跡中央南半の４・５次調査地一帯にさらに集約される傾向がうかがえる。ただし，砂堆の北側に位置する３次調査試掘坑Ｄ７においても縄文晩期の貝ブロック検出が報告されているため〔昭54年報　p.42〕，未調査の多い北半域に別なまとまりが存在する可能性には留意しておきたい。

弥生中期・後期　弥生中期になると再び資料の出土は希薄になるが，２次調査Ａトレンチ北半域で微量の出土が知られる〔昭52年報　p.23〕ほか，未報告ではあるが中期後葉の資料が４・５次調査で若干出土している。弥生前期までの利用空間である遺跡中央付近と東方の標高のやや高い一帯をそのまま継承して，小規模な活動が継続されていたものとみて良さそうである。

古墳時代　４・５次調査において庄内式併行期を中心とする古墳前期の資料が土器溜

調査次数	縄文																	
	中期以前	後期			晩期			弥生			古墳			奈良	平安	中世	近世
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前期	中期	後期	前期	中期	後期				
第1次							◎					△	△				
第2次	△		△	◎		○	◎	△	△	△	△	○	△		△	△	△
第3次							○				○	△		△	◎		
第4・5次	△			△		○	◎	◎	○	△	◎	△		◎	△		
第6次（今回）		△	△	○			△						△	△	△		△

△: 土器存在は確認　○: 一定量の土器出土　◎: 濃密な土器出土や遺構存在

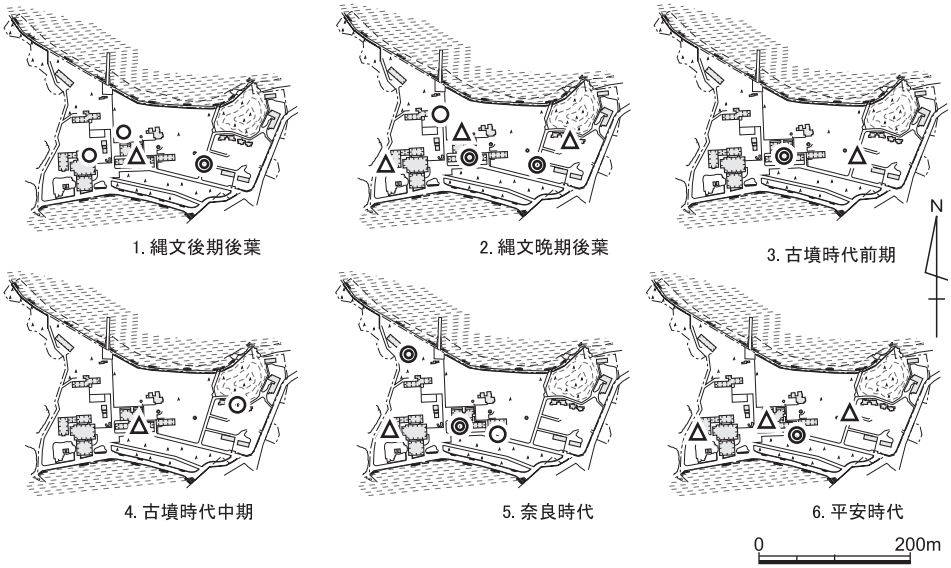

図20　瀬戸遺跡（瀬戸臨海実験所構内）における遺物・遺構の確認状況概観　縮尺1/10000

から大量に出土しており，第３の画期となる（図20－３）。出土土器の９割が1000個体をかぞえる目良式土器Ｂ類の製塩土器であり〔昭57年報　p.58〕，遺跡の性格を明瞭に示している。この段階の製塩土器資料は，他の調査でも出土しているが，遺跡の東域となる２次調査区で少量出土しているほかは〔昭52年報　p.29〕，４・５次調査区のある遺跡中央一帯にほぼまとまるようである。布留式期以降は，資料が減少するようであり，さらに中期～後期になると，遺跡中央一帯での出土は希薄となり，２次調査区Ｂ・Ｃトレンチなど遺跡東域での出土が顕在化している。時期不詳ながら３基の箱式石棺などが確認されており〔昭52年報　p.27〕，製塩遺跡と異なる居住や墓域の空間が展開していた可能性があり，今後更なる調査検討が求められる。

奈良・平安時代　　４・５次調査区では，石敷製塩炉と須恵器埋甕，８世紀後半代に位

置づけられる製塩土器が大量に見つかっており〔昭57年報　pp.59－60〕，この段階が第４の画期と位置づけられる。製塩遺跡としては古墳時代と同様に遺跡中央の一帯が中心となっているが，西北辺での立合調査（図７－10地点）での遺構確認や今回のＣ地区で遺物出土を考慮すると，関連する遺跡の広がりが西側エリアにも想定できるかもしれない。また，こうした状況は，黒色土器の出土などから平安時代の11世紀ころまで小規模化しつつ継続したものとみられる。

中世・近世の瀬戸遺跡　２次調査Ｃトレンチにおいて中世の羽釜や近世の灯明皿と染付の出土が知られており〔昭52年報　31図〕，今回も染付細片を採集している（図16－Ⅰ６）。これまで，中近世にかかわる遺構の確認はない。しかし，近世の瀬戸地域については，紀州藩主徳川頼宣が17世紀代にたびたび湯治に訪れ，「瀬戸御殿」とされる別邸を建築したことが知られており，現在の瀬戸臨海地区がその比定地とされている〔白浜町1986 pp.274－281〕。また，西に隣接する「番所山」の名称は，海防のために紀州藩の瀬戸崎番所が設置され与力が常駐していたことに由来している。今後の調査に際して，こうした履歴にも注意を払っておく必要があろう。

課　題　以上，調査成果から瀬戸遺跡の展開を追跡してきた。製塩遺跡の性格が明瞭な古墳前期や奈良時代については，遺跡中央付近の南半，尾根状となる陸繫砂州の南側が濃密な活動空間となる状況がうかがえた。一方縄文時代については，Ｂ区の成果から，後期中～後葉における砂州北半一帯への遺跡のひろがりが判明し，活動域の拡散が示唆された。近年，近畿地方晩期の長原タイプ土偶の成立に東北地方の前～中葉における屈折像土偶の系譜からの影響を説く議論が提出され，1980年採集の土偶についてもその系譜上で再評価されている〔寺前2015〕。今回Ａ区で前葉期の土器が出土したが，後期前半代の様相は不明なままであり，砂堆の形成過程も含めて検討を続けていく必要がある。こうした，長期にわたる海浜部の地形環境変動と人間活動との関連を検証する上で，瀬戸遺跡は格好の条件を備えた空間となっている。既調査地の詳細な報告を果たしつつ，その利点を活かした学術資源や地域文化財としての遺跡の活用が，今後の重要な課題と言えよう。

謝　辞　今回の調査に際しては，本学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所・白浜水族館，本学施設部，そして白浜町教育委員会には，格別の配慮と助力をいただきました。末尾ながら厚く御礼申し上げます。